

# 第2章

## 大使館の仕事 — 経済協力を中心に



大使館の屋上から見た夕焼けのモモンボ火山、  
マナグア市は高いビルがほとんどない

## 一 大使館の仕事

小規模公館では、規模にもよるが約三〇人が働いている。大使を含めた日本人（館員）が一〇人ばかり、現地で採用されたローカルスタッフと呼ばれる人々が二〇人ぐらいである。さらに後述する草の根援助を担当する委嘱員が三〜四名という構成である。大使は館全体を統括しなければならない（コラム）。大使館の仕事は大きく分けると、外交・政務、経済、経済協力、領事業務、文化・広報等である。経済協力は後述することにして、外交・政務の仕事は、外交上の問題を外務本省の指示のもと、任国政府に働きかけ交渉を行う。日本が国連に提案する案（たとえば、国連安全保障理事会改革案）なり、国連機関の日本人候補（たとえば、国連開発計画UNDPの総裁選挙）を支持してもらおうといったことが含まれる。任国における政治状況の把握・情報収集といった仕事も入る。経済の仕事は、任国の経済状況の把握・情報収集のほか、日本企業の問い合わせに対して当地の投資環境を説明したりする。領事関連の仕事で一番大切なのは、日本人の生命、財産を守ることである。とくに日本人旅行者がトラブルにあったときにその解消に努める。旅行者が強盗にあつてパスポートを盗られたりすると再発行や一時帰国用許可証を出したりするのがこの例である。

文化・広報の仕事は多岐にわたるが、日本の芸術や文化の紹介、日本人演奏家の公演開催、関連シンポジウムやワークショップの開催、逆にニカラグアの芸術家や文化人の日本訪問の手助けなどが含まれる。大使館独自で行う行事のほか、大使館は国際交流基金と密接に連携してこうした種々の文化案件を進めている。経済協力を含めてこうした広範囲の仕事  
をニカラグアのような小規模公館ではわずか十人ぐらいの館員たちが分担している。

## 大使の仕事

### コラム1

大使はどんな仕事をするのだろうか。外務省が定める大使の仕事には以下のよ  
うなものが含まれる。

- 一 担当国において日本政府を代表し、日本の国益の増進および日本国民の生命、財産の保護に努める。
- 二 担当国において日本の外交政策の遂行および交渉の任に当たる。
- 三 担当国政府要人を含む各界の指導者等と幅広く人的関係を構築することにより、当該国情勢の把握に努め、外務大臣に随時報告する。

---

四 担当国における在留邦人および邦人渡航者の実態を把握し、領事業務の円滑な実施を確保する。担当国において活動する日本企業を支援する。

五 日本と担当国との経済・経済協力関係の強化に努める。

六 担当国政府および国民が日本に対する正しい理解を深めるための広報活動や文化交流を推進し、担当国と日本との相互理解と友好関係の発展に努める。

七 日本が取るべき施策等について外務大臣に意見具申する。

八 大使館の事務を統括し、館員が能率を最大限に発揮できるよう館務の運営を行う。

とにかく大使は人と会い情報を取らねばならず、仕事上の食事・レセプション等の数は週に二、三回以上ある。そのためには胃袋や肝臓も強くないと務まらない。大使というのは正に体を張った職業である。

---

大使は大使館の長なので一々八にある大使館のすべての業務を統括する。館員は、政務、經濟協力、領事等を分担する人のほかに、医務官や警備の人、専門調査員、派遣員を含む。また公邸料理人もいるのでそれらすべてに気を配らなければならぬ。また、大使館にはローカルスタッフといわれる現地採用の人もなくさん働いていて小規模な大使館では日本人スタッフより多く、日本人のみならずそれらの人々が安心して働ける環境をつくるのも大使の役目である。

マナグアには三〇以上の大使館があり、大使が常駐している。大使を送っていない国もスイスやカナダのようにその国の援助機関が事務所を構えている。また、国連開発計画（UNDP）などの国連機関、世界銀行、国際通貨基金（IMF）、米州開発銀行（IDB）等の事務所もあり、外交団の数はかなりに上る。これら大使館等との交流・協調を深める活動も行われている。經濟協力において各国の重複や無駄を省くための援助協調委員会といったはじめな会合から息抜きのためのサッカー大会など盛りだくさんの活動が行われ、そういった活動にも日本大使館は積極的に関与している（コラム②）。

## 大使館対抗サッカー大会

二〇〇六年六月にサッカーのワールドカップがドイツのミュンヘンで行われた。それを記念してマナグアでもドイツ大使館が中心となり大使館対抗サッカー大会が開催された。マナグアには三〇以上の大使館があり、そのうち半数以上が参加した。当地ニカラグア政府も選抜チームを結成して参加した。ワールドカップの前哨戦ということで二〇〇六年三月一八日にドイツ学校のグラウンドを借りて大使館対抗戦は行われた。日本大使館チームは強力で草の根班のTさんを中心に編成された。Tさんは元青年海外協力隊のサッカー隊員であった。ニカラグア人と結婚して、大使館に来る前にはグアテマラのプロサッカーチームに入っていたという根っからのサッカー青年である。また大学時代にサッカーをやっていたという頼もしいYさんもいる。さらに若いころサッカーをやっていた今はロートルの草の根班のKさん、この人はしぶいパスを出す。また、青年海外協力隊の活きの良い若者たちも入っている。そんなこんなで我が日本大使館チーム（写真19）は前評判から強いといわれていた。

日本大使館チームはフランス（四対〇）、フィンランド（六対一）、オランダ（三対〇）の各大使館チームを次々に破り準決勝に進出するため、強敵ブラジル大使館とぶつかった。これも二対一で破って準決勝進出、ニカラグアと対決した。これが大変な激戦であった。ニカラグアはホームの強さでねばり、二対二でついにPK戦にもつれ込んだ。我が大使館チームのゴールキーパーは、ワシントンの日本大使館から来た将来を嘱望される若きAさん、しかしなにしろサッカーは素人である。残念ながらPK戦（二対二）でニカラグアに敗れてしまった。決勝に残ったのはニカラグアとコスタリカ大使館であった。さすがにサッカーはラテンアメリカが強いということである。その上、ニカラグアは一年中夏とい



写真19. 日本大使館チーム（大使館提供）

う暑い気候である。猛暑に慣れていけないといけない。この日もカンカン照りの猛暑であった。結局ニカラグアがコスタリカにせり勝って優勝した。結果的には地元の花を持たせたということである。

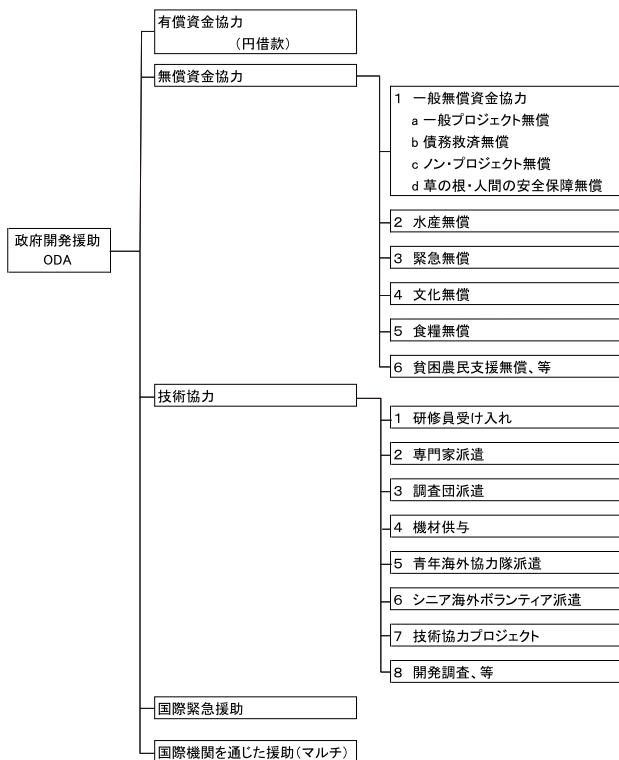
三位決定戦は日本とスイスが激突した。日本は大柄な選手が多いスイスを四対二で破り、三位を仕留めた。欧米列強に勝り先進国のなかでは日本が一番になったわけである。日本大使館はフランス、フィンランド、オランダ、ブラジル、スイスという強敵を次々に下して堂々と三位に輝いたのであった。強豪ブラジルを打ち砕いたのも立派であった。マナグアにいる日本人はわずか一五〇人ほどであるが、サッカーにおいて我が国の名声を高めたのは草の根班のTさんをはじめ、日本人の若手集団であった。(なお、日本チームはその強さを維持し、二〇〇七年四月〜六月に行われた大使館対抗フットサル大会で見事優勝。)



## 二 重要な經濟協力の仕事

日本の經濟協力は政府開發援助（ODA）とも言われるが、大きくは有償資金協力、無償資金協力、技術協力を分けられる（図3）。有償資金協力は資金を貸すことを意味する。貸し出された円建て資金は、市場金利よりは低い利子が付くが借り手国は元本と金利分を返済しなければならぬ。一般的に「円借款」といわれている。借り手国はその資金で高速道路や水力発電所等を建設する。無償資金協力は資金を対象国に無償で提供する。供与された国はそれを返済しなくてよいので贈与あるいはグラントと呼ばれる。無償資金協力には一般プロジェクト無償（学校や病院の建設等）、草の根・人間の安全保障無償（地方の小規模案件の他、内戦後の復興や難民対策に活用）、水産無償（漁港や魚市場の建設等）、文化無償（博物館への照明施設や学校への体育機材の供与等）がある。また財を購入するための無償資金供与がある。これにはノンプロジェクト無償と貧困農民支援の二種類がある。ノンプロジェクト無償は、被援助国のマクロ經濟安定化のために工業用中間財（鉄鋼製品、セメント、化学原材料等）を提供する。貧困農民支援は零細農民を助けるために化学肥料や農機具等を提供する（一般的に2KRと呼ばれていたが二〇〇五年に「食糧増産無償」と名称変更）。

図3. 政府開発援助の分類



(注1) ニカラグアでは「見返り資金」の原資は、図中1一般無償資金協力のc ノン・プロジェクト無償と6 貧困農民支援無償の現地通貨債み立て分より成る。

(注2) 2008年10月1日より、国際協力機構(JICA)に外務省の無償資金協力と国際協力銀行(JBIC)の円借款部門が移管される。但し、ノン・プロジェクト無償、草の根・人間の安全保障無償、緊急無償等は引き続き外務省に残る予定。

出所：政府開発援助白書等より筆者作成。

こうした財の授受には国際的で中立的な調達業者が選ばれて行っている。

日本はこうした財の調達に必要な資金を相手国政府の口座に直接入金し、調達業者はこの資金を用いて国際市場で必要な財を購入し相手国に送る。相手国の中小企業や零細農民はそれらの財を市場価格より安い値段でなおかつ現地通貨で購入する。この購入代金は中央銀行に積み立てられて相手国政府の開発資金として再利用される。この積み立て資金は「見返り資金」と呼ばれる。日本からの無償資金が相手国の開発に二回役立つことになるわけで大変興味ある制度といえる（「見返り資金」は、第二次世界大戦終了後のヨーロッパにおいて行われた「マーシャル・プラン」や日本の戦後復興のために行われたガリオア・エロア資金、公法四八〇号の農産物援助において導入された仕組みである）。

技術協力は日本の高い技術を相手国に伝えるもので国際協力機構（JICA）が実施を担当している。技術協力プロジェクト（農・林・水産業開発、畜産開発、地図作成、中小企業支援対策等の具体的技術協力を専門家、研修、機材等の手段を組み合わせて実施するプロジェクト）、開発調査（開発に役立つプロジェクトのフィールドリサーチ調査でこの調査結果が一般プロジェクト無償案件に引き継がれるケースが多い）、日本人専門家派遣、青年海外協力隊員派遣、シニア海外ボランティア派遣、相手国研修生の受け入れ、災害緊急援助（災害に際して毛布、テ

ント、薬品、小型発電機等の物資を緊急に送る）の事業を行っている。

大使館はこうした日本の経済協力案件をほとんどすべて現地でもモニターするのみならず、それらが成功するように管理・監督を行っている。経済協力の最前線基地といえるだろう。それ以上に重要なのは、協力案件の決定過程にも大使館は深く関与していることである。

### 三 援助の目的

ここで、なぜ援助を行うのかという根本的な問題について若干考えてみよう。大使館は、日本人の財産と生命を守り、国益に沿った活動をしているが、日本は軍隊を持っているわけではない。軍事力を行使できない日本の外交上の唯一の手段あるいは武器は援助であるといえる。援助は、発展途上国の貧困削減に寄与し、人道的配慮から行うもののほか、究極的には巡り巡って日本の国益に還元される、あるいは利することを期待して行われる。まさに「情けは人のためならず」なのである。たとえば、相手国の経済発展を支援するインフラストラクチャー（道路、港湾、空港、電力、通信等）への援助は、それにより同国の製造業の発展を助け、段階的に日本からの部品輸入などを増やし、また日本からの投資を呼び

込み、さらに同国の所得が増えることで日本との連携関係が強まるといった効果をもたらす。タイやインドネシアへの今までの日本からの援助は正にこうした好例である。相手国の発展に伴い巡り巡って日本も繁栄を享受する、すなわち共存共栄の精神である。

#### 四 援助の仕組みと選択過程

援助案件はどのように決定されるのだろうか。最近では発展途上国のオーナーシップの尊重、すなわち自助努力の優先がいわれる。被援助国側が自主的に選んだ援助案件を政策協議の場を通じて決定するというものである。これは今までの「要請主義」とそれほど矛盾するものではない。日本が援助案件を勝手に決めるのではなくて、現地政府が優先度の高い順から案件を決めて日本と協議する。毎年八月末までに東京の外務本省あてに次年度行う援助案件を提出する、いわば締め切りがある（本省は、これを要望調査と呼んでいる）。そこで大使館は五月ぐらいから現地の相手国外務省を通して日本に要請する援助案件を各省庁が挙げるよう依頼する。相手国外務省はこれらの要望案件をまとめて、優先順位を付け大使館と協議する。

一方、各日本大使館では二〇〇三年から「ODAタスクフォース」という現地援助検討委員会を立ち上げ現地政府との政策協議に積極的に関与している。大使館の援助担当官を中心として、現地に事務所のある場合は国際協力機構（JICA）、国際協力銀行（JBIC）、日本貿易振興機構（JETRO）等の担当者も加えたいわば「オール・ジャパン」の援助検討グループである。この検討グループは定例で月一回は集まり援助関連の議論を行い、お互いに情報交換を行っている。毎回ではないにせよ、現地政府側の援助担当者も会に出席する。このタスクフォースが現地政府から要請のあった援助案件を検討する。その際、案件選択の基準となるのは、日本の「国別援助計画」によって決められたその国に対する開発優先分野である。ニカラグアではこの「国別援助計画」が最近では二〇〇二年に作成され、その中で六分野が開発優先分野として決められた。それらは、農業・農村開発、保健・医療、教育、道路交通インフラ整備、防災、ガバナンス（民主化支援）である。

毎年八月二十日前後に大使館と現地外務省の経済協力担当官との共同の会議（政策協議）が開かれる。そこにはニカラグア外務省次官（経済協力担当）も出席して次年度援助案件の日本申請分を協議し最終決定する。ニカラグア側の優先順位と日本側の意見が分かれるときは調整が図られる。こうして決められた案件（例年優先順位に応じ無償案件一〇ぐらいと技

術協力・開発調査案件二ぐらい)が東京に送られて東京サイドの決定(例年二、三月までに)を待つことになる。例年東京では、次年度予算を勘案して、一般プロジェクト無償案件二件ぐらいと文化無償案件一件ならびに技術協力・開発調査案件一件ぐらいをニカラグアから提出されたリストの優先順位の高い方から決定している。

以上のように大使館は、援助案件の選定過程においても非常に重要な役割を果たしている。

## 五 援助実績

日本のニカラグアに対するODA援助実績は、二〇〇六年度末で円借款残高が約二一億円、ただし二〇〇四年七月に約一二九億円の債権放棄が行われた。無償資金協力は交換公文ベース累計で約六三一億円である。ハリケーン・ミッチ以来堅牢だということと日本の名声を高めた一五の橋梁建設(二〇〇七年度から新たな四橋の建設が始まる)、基礎教育施設整備計画として小・中学校一四三校の建設(二〇〇六年度からさらに六五校の建設開始)、グラナダの総合病院建設に加えて、医療センター整備として保健センター一二の建設(二〇〇七年からはボアコ総合病院の建設も開始)等が含まれている。また水産無償のサン・ファ



写真20. 拘置所改修式典にて



写真21. 日本から購入した三台の地雷除去機



ン・デル・スル漁港建設や文化無償のスポーツ機材供与等も入っている。

JICAを中心とした技術協力は、二〇〇六年度末累計で、研修員受け入れ一〇〇二人、専門家派遣二八五人、調査団派遣九八五人、機材供与一〇・八億円、青年海外協力隊派遣三九六人、その他ボランティア派遣二一人となっており、総額で約一五九億円に上る。

これらに加えてノンプロジェクト無償と貧困農民支援を利用してニカラグア政府が積み立てた「見返り資金」によって、毎年数億円の経済・社会開発事業が行われている。この資金はニカラグア政府のものであるが、日本側と協議して使用され同国の開発に非常に貢献している。例として、マタガルパ市の最高裁判所建設や警察署の拘置所改修（写真20）は、ガバナンス向上プログラムの一環として行われたが、同プログラムに関連して複数年度にわたり一〇億円弱が使用された。人間の安全保障の観点からは、対人地雷除去作業プログラムにおいて三台の地雷除去機を購入（写真21）したが、除去作業関連費用を含めてプログラム全体で総額約六億円が支出された。また、ニカラグアは太平洋側と大西洋・カリブ海側が陸路でまだ結ばれていない。ニカラグアのほぼ中央を東西に結ぶエル・ラマーククラヒルーラグナ・デ・ペルラス農道建設（全長九三キロメートル、約五億円）が二〇〇五年より着手された（写真22）。これが完成すればマナグアからラグナ・デ・ペルラスまで車により



写真22. エル・ラマククラ・ヒルラグナ・デ・ペルラス農道建設開始

七〜八時間で行けることになる。この農道の経済効果は非常に大きいと期待されている。このように「見返り資金」は、ニカラグアの開発に役立っていると高い評価を受けているのである（ニカラグアでは、日本以外に米国、カナダ、イタリアが同様の枠組みを持っていると聞いた）。

援助が行われると、そのプロジェクトの起工式、定礎式あるいは竣工式といった節目に式典が行われ、場合によっては大統領や大臣が出席することもある。また草の根援助のように地方が主体のものは、市長や地元の有力量者が出席する歓迎式典が催される。援助を受けるニカラグア側も心得ていて日本へ感謝の意を込めた式典を上手にアレンジする。音楽

### コラム3

#### 式典における催し物

や踊りが大変好きな国民性なので、その演出は巧いものである。こうした式典に出席するのも大使の役目だが、同時に楽しいものであった（コラム3）。

草の根援助のみならず、さまざまな式典において必ず行われるのが文化的催し物と称されるショー・タイムである。詩の朗読、寸劇、歌と楽器演奏、踊りと音楽等が行われる。ニカラグアは詩聖ルベン・ダリオを生んだ国だけあって詩が盛んである。式典で小学生が朗々と詩を朗読する有様は見事なものである。寸劇はその時のテーマにあった題材を子供たちが演じる。国連の世界食糧プログラム（WFP）との共同プロジェクトで山奥の学校に行ったときには、「嫌いでも野菜を食べなさい」と演っていた。ごく一般的なのは、音楽である。ギターとマリンバに

よる演奏、縦笛とアコーディオンの合奏、メキシコ風のマリアッチも非常にポピュラーである。

しかし、なんといっても頻繁に行われるのが踊りである。男の子は農民風のシャツとズボンを履き、手に刃の長いマチェツテといわれる労働用の鉋を持つ。女の子は白袖が長く、袂の深い民族衣装を着て踊る。曲は農村に伝承されたものやフォークソングである。女の子が手を広げたり閉めたりすると白い衣装がゆったりと蝶の羽のように舞う(写真23)。おじいさんとおばあさんの格好をして絡み合うものもある。ちよつとエロチックである。おば



写真23. 農民の踊り

あさんが観客を誘ったりするので見物客は大笑いである(写真24)。また、スペイン宮廷から入った優雅な踊りもある。きらびやかな宮廷服に頭上には羽飾りが付いた衣装で雅に踊る。さらには、グイグエンセといわれる仮面踊りもある。馬の顔、王様、家来といったお面を着けて踊る、仮面劇に由来するダンスである。カリブ海側ではアフリカの影響の強いダイナミックなアフロダンスがある(写真25)。踊りの音楽はパロ・デ・マイヨといわれている。とにかく、衣装を付け踊ることで子供たちはますます輝きを増す(写真26)。



写真24. ジーサン・バーサン



写真25. カリブの踊り



写真26. 勢ぞろい